

# イタリアオペラにおけるベル・カント唱法の実践研究

1997年度在外学術研究報告書 (1997, 8, 28～1998, 8, 29)

山 本 裕 之

## はじめに

平成9年度神戸親和女子大学在外学術研究員として、イタリアのミラノでの1年間の研修を終え帰国致しましたので、ここに研究内容を報告させていただきます。

今まで、日本でイタリアオペラを中心に研究してまいりましたが、オペラの発祥地であるイタリアで、1年間にわたりベル・カント唱法を研究することができましたことは、多くの新しい課題を得た、貴重な体験となりました。このような有意義な研修機会を与えて下さいました皆様に心より感謝を申し上げます。今後はこの経験を生かし、教育・研究・演奏になお一層の努力をする所存でおります。

ありがとうございました。

平成10年9月25日

神戸親和女子大学 文学部 児童教育学科

## 目次

はじめに

|                              |     |
|------------------------------|-----|
| 1. 研究目的 .....                | 103 |
| 2. 研究期間 .....                | 103 |
| 3. 訪問国 .....                 | 103 |
| 4. 主たる研究機関 .....             | 103 |
| 5. 研究・実践の概要 .....            | 103 |
| 6. 訪問都市一覧 .....              | 104 |
| 7. 研究・実践の内容について .....        | 104 |
| 8. 取得資格等について .....           | 120 |
| 9. 研究成果の発表について .....         | 120 |
| 10. 在外学術研究員規定に基づく現況報告書 ..... | 122 |
| (1997, 9～1998, 8)            |     |
| 11. 取得資格証 (コピー) .....        | 136 |

### 研究目的

- ① イタリアのベル・カント唱法の実践研究。
- ② イタリア歌曲，イタリアオペラの歌唱法の研究。
- ③ オペラ公演鑑賞等による演技法の研究。
- ④ イタリアオペラ歌唱のためのイタリア語の研究。

### 研究期間

平成9年8月28日～平成10年8月29日

### 訪問国

イタリア

### 主たる研究機関

- ① TEATRO ALLA SCALA  
(ミラノ・スカラ座歌劇場)
- ② CORSO STATALE DI ALFABETIZZAZION E FORMAZIONE LINGUISTICA PER STRANIERI (外国人のための国立イタリア言語学課程)

### 研究・実践の概要

- ① 平成9年9月より平成10年6月まで，ミラノ・スカラ座歌劇場副指揮者を務めるダンテ・マッツォーラ氏の下でイタリア歌曲及びイタリアオペラの歌唱法の指導を受ける。
- ② 平成9年9月より平成10年7月まで，ヴィヴァルディ音楽院教授：ヴィットーリオ・テッラノーヴァ氏の下でイタリアオペラの歌唱法，発声法の指導を受ける。
- ③ 平成10年1月より平成10年7月まで，元ミラノ・スカラ座歌劇場合唱団長：アントニエッタ・ブラガニョーロ氏の下でベルカント唱法の指導を受

ける。

- ④ 平成9年10月より平成10年6月まで、外国人のための国立イタリア語学校のマエストラ：ティツィアーナ・フリゴリ氏の下でイタリア語の発音，文法，会話等の指導を受ける。
- ⑤ ミラノ・スカラ座歌劇場主催によるオペラ公演，バレエ公演，及び管弦楽公演の鑑賞。
- ⑥ ヴェローナ野外劇場主催によるオペラ公演の鑑賞。

### 訪問都市一覧

- |                   |                        |
|-------------------|------------------------|
| ① ミラノ(イタリア)       | ⑨ ミュンヘン(ドイツ)           |
| ② ルガーノ(スイス)       | ⑩ ショーンガウ(ドイツ)          |
| ③ ヴェネツィア(イタリア)    | ⑪ フュッセン(ドイツ)           |
| ④ フィレンツェ(イタリア)    | ⑫ ガルミッシュ・パルテンキルヘン(ドイツ) |
| ⑤ ベルガモ(イタリア)      | ⑬ バートテルツ(ドイツ)          |
| ⑥ クレモナ(イタリア)      | ⑭ ジェノヴァ(イタリア)          |
| ⑦ コモ(イタリア)        | ⑮ ポルトフィーノ(イタリア)        |
| ⑧ インズブルック(オーストリア) | ⑯ ヴェローナ(イタリア)          |

### 研究・実践の内容について

#### ベル・カント唱法

◎ベル・カント唱法とは

ベル・カント (Bel canto) 『美しい歌声による素晴らしい歌唱』と訳すことのできるイタリアの歌唱様式である。一口で述べるところであるが，音楽用語の中で，このベル・カントほど漠然と用いられたり，多義に解釈されやすい語はない。

一般的には、18世紀及び19世紀初めのイタリアの優美な声楽様式を指すと考えられている。最初はイタリアのフィレンツェに始まり、『独唱』という演奏形態を芸術の領域までに高めた音楽家によって成された功績に対して『Bel canto』と名づけられた用語で、ほどなくその他のイタリア各都市に広まることになったものである。

ベル・カント唱法の良き理解者：ロッシーニ（作曲家）によるとベル・カントの歌手は、次の三つの条件を満たしていなければならないと言う。

1. 声域全体にわたって、音質にむらのない自然で美しい声を具えていること。
2. 華麗な音楽をたやすくこなすための入念な訓練を積んでいること。
3. 教わるものではなく、イタリアの最高の歌手の演奏に耳を傾け、同化することによってしか会得できない熟達した様式を身につけていること。

以上の三つの点である。とはいえ、やはり言葉の意が漠然としていることには違いない。また、17・18世紀に実際に応用されていたと考えられるベル・カントの原理は、今日、ほとんど知られていないというのが現実である。

#### ◎ベル・カントの歴史

後期ルネッサンスのイタリアは声楽の黄金時代と言っても過言ではない。1600年にオペラが創案されると、その発達により、歌手たちはポリフォニー様式の持つ厳格なきまりに従う義務はなくなり、新しい時代へと変化して行った。

ほぼ半世紀近くの間、この新しい音楽の提案者たちは、自分たちの芸術的理想を確実に追求し続け、ドラマや音楽、演技などは巧みに総合され、『オペラ』と呼ばれる芸術を創り上げて行った。

次第に、時の経過と共にオペラにも変化が見えはじめた。『ダ・カーポ・アリア』の演奏にあたって、ある程度の自由が認められはじめると、歌手は譜面通りには歌わないという習慣ができはじめる。ドラマそのものよりも、声のひけらかしに終始する演奏に聴衆が相当に強い感心を持つと、芸術的価値は軽視され、オペラは偉大な声を持つ力と能力を誇示するためにかかれた意味のない

ものとなった。

しかしながらも、この時代が音楽史上『声楽の黄金時代』と呼ばれた時代であった。この時期に歌唱の芸術は、その極致に達したと認められており、その発達と発声として確立した様式が、『ベル・カント』と呼ばれるようになったのである。

このイタリア声楽芸術の隆盛は、ベル・カント様式の名声を全ヨーロッパ大陸に轟かせただけでなく、発声技術の原理の確立に大きな力となり、衰えつつありながらも18世紀から19世紀、更に20世紀に至まで、大きな影響を及ぼし続けてきた。

#### ◎ベル・カントの基礎原理

ベル・カントの原理に従って声を発達させることは、発声の基礎を学ぶことでもあると言える。

ベル・カントの初期、声を追求し、声楽を教えていたその道の専門家たちは、部外者にその指導法が漏れないよう厳しく管理されていた。彼らが行っていたトレーニングはおそらく10年くらいは当たり前であったと思われるような長期間なものであり、一人の教師のもとで徹底的に繰り返されたレッスンに基づいていた。その中な、最も注意が払われたのは、「完成された音と純粋な母音の音質の理想を生徒の中に浸透させること」であった。

声楽家にとって、発声の原則を再検討し、高めて行くことほど重要なことはない。昔の教師たちが案出した訓練手順として次の二つが挙げられる。

1. 視唱と発声とが並行されていること。
2. どんな音階や音程であっても発声するにあたっては、ゆっくりとていねいに歌うこと。

これだけ聞くと、当然のことと思われるが、このようにしてまず、母音を純粋な音に整えなければ、美しい音の基礎を築くことはできないだろう。

近年、音響についてのいろいろな調査がなされた中で、昔のベル・カントの教師たちが経験の中だけで観察していたものが、実は母音の純化にとって有効

であったと証明された。それは結局、彼らが直観的に努力していた目的が実は望ましい音響状態と同一のものを作り出すことであった。『純粹な母音』を作ることとは、声帯器官を順調な調節の状態にしておくことであり、こうした調節状態ができてこそ望ましい調和を持つ音響的な反応が起こり、音質に美しさと純粹さが増してくるのである。自分たちの声の音響状態を思い通りにコントロールする方法はこれしかなく、この方法だけが歌手に与えられる唯一の手段であると言える。

当時のベル・カントの重要な教師の具体例をみると、いずれも母音の純化について同じことを挙げている。

まず最初に与えるのは、可能な限り単純な音形をした練習曲であった。母音の響き (Vibrazione) を深めることに大切なことは、基本的な発声をゆっくりと、そして継続的な練習が最良とされている。母音で各音を音立てすることは、その母音にふさわしい音色や濃淡を選択することができる。また、姿勢や口と頭の構え、強弱に対しての細かい点に至るまで注意を払うことにおいても行き届かせることができる。これを習慣化し、パターン化し、条件反射的な作用にして行くことが大切である。

#### 《引用・参考文献》

1. 「うたうこと」フレデリック・フースラー著 (音楽之友社)
2. 「ベル・カント唱法」コーネリウス・リード著 (音楽之友社)
3. 「Il canto e le sue tecniche」アントニオ・ユヴァッラ著 (リコルディ)
4. 「ニューグローブ世界音楽大辞典」(講談社)

①ダンテ・マッツォーラ氏によるイタリアオペラ、イタリア歌曲、ナポリ民謡の歌唱法について。

◎研修回数：47回

◎研究曲目一覧

### 1. オペラ

- マスカーニ作曲オペラ『カヴァレリア・ルスティカーナ』
- プッチーニ作曲オペラ『ラ・ボエーム』
- プッチーニ作曲オペラ『トスカ』
- プッチーニ作曲オペラ『マダム・バタフライ』
- ヴェルディ作曲オペラ『アイーダ』

### 2. イタリア歌曲

- トスティ作曲『Ideale』
- トスティ作曲『Penso』
- トスティ作曲『A Sera』
- トスティ作曲『Ancora』
- トスティ作曲『Vorrei』
- トスティ作曲『Malia』
- トスティ作曲『Segreto』

### 3. ナポリ民謡

- ディ・カプア作曲『オ ソーレ ミーオ』
- デ・クルティス作曲『帰れソレントへ』
- デ・クレシェンツォ曲『巣に帰るつばめ』

### ◎研修内容

上記の曲について指導を受けたが、その要点をまとめたものを下記に記す。

- ・イタリア語の正確な発音。特に、L・R・N・S・Gli の発音。
- ・発音にも発声にも言えることであるが、息が途切れることなく、その息の流れに乗せて発音し、発声する。つまり、日本語と違い、常に横隔膜をよく使った呼吸法の上で発音し、発声する。
- ・ベルカント唱法をよく理解しているイタリアの音楽家：ロッシーニも書いているが、「レガート唱法のできない者は歌うな!」。この言葉の通り、常に声をなめらかに繋げることが大切である。



- ・正しいアクセント (Accento) によるイタリア語の発音。
- ・常に声の響き (Timbro) のポイント (Punto) が、上顎から鼻、そして目と目の間の部分にある。絶対にずれることはない。
- ・母音の変化により、声の響きにむらができてはいけない。常に豊かな響きを。
- ・音の下降とともに横隔膜の緊張が緩み、声が落ちてはいけない。
- ・特に、高音 (Acuto) において、声が揺れるのではなく、エネルギッシュな緊張感のある響き (Vibrazione) が必要である。
- ・イタリア語を発音した時の語感と、その意味によるニュアンスが常に一致しなければならない。
- ・楽譜に書かれてある音楽用語・テンポ等を正しく理解し、豊かな音楽性を持って表現しなければならない。
- ・常に声の響きは上方へ、横隔膜の支えは下方へ、この相反する動きのバランスを調整しなければならない。そこからダイナミックな声のエネルギーが生まれる。

#### ◎ダンテ・マッツォーラ氏の略歴

ミラノに生まれる。スペインのバルセロナ音楽院ピアノ科・作曲科を最優秀で卒業。バルセロナのリチェオ劇場を皮切りに、カターニャのベッリーニ劇場、ヴェネツィアのフェニーチェ劇場、ヴェローナのアレーナ劇場等、イタリアの主要歌劇場を経て、1969年より現在までミラノ・スカラ座歌劇場の副指揮者兼ラッメントトーレ (プロンプター) として活躍している。

また、ピアニスト、チェンバリスト (スカラ座室内弦楽奏団の一員)、指揮者としての演奏活動も活発でイタリア国内はもとより、ヨーロッパ各主要都市、アメリカ、ロシアと世界に及んでいる。

最近ピサにおいて『モーツァルトーダ・ポンテ』及び『モンテヴェルディ』の演奏プロジェクトを繰り広げ、高い評価を得ている。ピサ・ヴェルディ劇場の芸術助監督も務めている。ピサでの成功に伴いマントヴァにも招かれ、その

洗練された音楽性あふれる指揮は各新聞紙上で絶賛を浴びている。

数年前よりザルツブルク夏期音楽祭にリッカルド・ムーティの強力な副指揮者として参加。また、著名な指揮者（アッバード、クライバー、マゼール、ムーティ、小澤、サヴァリッシュ、シノーポリ等）のアシスタントとしても絶大な信頼を集めている。

② ヴィットーリオ・テッラノーヴァ氏によるイタリアオペラの歌唱法、ベル・カント唱法のための発声法について。

◎研修回数：15回

◎研修内容

- ・母音と子音を使ったベル・カント唱法のための発声法 (Vocalizzazione)



(c<sup>1</sup>音から半音ずつ上げて a<sup>1</sup>音まで、その後半音ずつ下がり c<sup>1</sup>音に戻る。)

- ・喉を締めつけない。
- ・常に響きを呼気に乗せて音を切るまで前へ感じる。
- ・横隔膜からの繋がりを意識する。



(e<sup>1</sup>音から半音ずつ上げて e<sup>2</sup>音まで、その後半音ずつ下がり e<sup>1</sup>音に戻る。)

- ・音は、半音ずつ上昇するが常に冷静に。
- ・1回ずつ、それぞれの音の上で、そして横隔膜を使い歌い直す。



(g<sup>1</sup>音から半音ずつ上げて b<sup>2</sup>音まで、その後半音ずつ下がり g<sup>1</sup>音に戻る。)

- 音が下がるにつれて手前へ声を引き込まない。常に身体の前へ、外へ。
- 高い音 a<sup>2</sup> 音と b<sup>2</sup> 音は、より音を丸くイメージし、Vo のように発音する。

4. 

vi a - - - - -  
vi o - - - - -  
vi e - - - - -

- なめらかに、しかし、横隔膜で音の粒を感じて。
- より響きを丸く、テンポを速く。
- 同じ音色を追求して、同じ身体のポジションで。

5. 

vi e - - e a e a e a e a e - - - -

- 同じ声の道で、同じポジションで、高音域になるにしたがって、声を出す方向を少し前へイメージする (Girare)。
- 横隔膜と繋げて、常に響きを前へ。

6. 

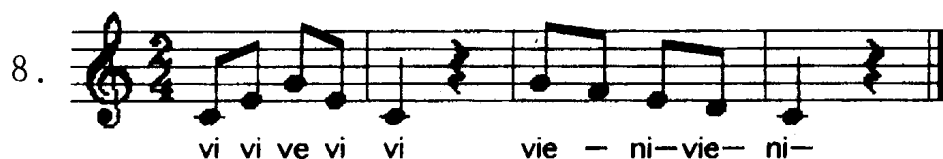
vi e - - - - -

- 最高音の As 音は、声を出す方向を曲げて (Girare)、よく響くポジションを探す。ただし、声を押さない。  
ファとソのポジションは近い。
- 高音の G 音から下は、喉を丸く開ける。(Aperto rotondo) しかし、より横隔膜の支え (Appoggia) が必要。
- 音が下に降りてきた時は、鼻を中心とした共鳴腔が狭くならず、より空間 (Spazio) を感じるように。

7. 

vi vi ve vi vi

- ・常に上唇に響きが乗っていること。



- ・Vi Vi Ve Vi Viの最後のViと同じポジションで次のVieを始める。



- ・高い音はより空間の広がりを感じる。
- ・降りてきた音は、鼻を中心とした共鳴腔をより開ける。(Aperto)

#### ◎ヴィットーリオ・テッラノーヴァ氏の略歴

イタリアのシチリア島出身のテノール・オペラ歌手。マリア・カルボネとサラ・スフォルニ・コルティに学び、1970年マントヴァでオペラ『清教徒』（アルトゥーロ）を歌ってデビュー。その後ミラノ・スカラ座歌劇場をはじめ、ローマ、ナポリ、ヴェネツィア、フィレンツェ等のイタリアの主要歌劇場、オーストリアのウィーン国立歌劇場、ドイツのベルリン、バイエルン国立歌劇場、アメリカのシカゴ・リリックオペラ、ニューヨーク・シティオペラ。また、スイスのチューリッヒ歌劇場、オランダのアムステルダム歌劇場、アルゼンチンのブエノスアイレス・テアトロ・コロソ歌劇場等に主役として出演している。

オペラ『リゴレット』、『椿姫』、『ファルスタッフ』、『ルチア』、『愛の妙薬』、『清教徒』、『セヴィリアの理髪師』、『セミラーミデ』、『シンデレラ』、『夢遊病の女』、『ジャンニ・スキッキ』、『ラ・ボエーム』、『蝶々夫人』、『魔笛』、『ドン・ジョヴァンニ』、『コシ・ファン・トゥッテ』、『ばらの騎士』、『ファウスト』、等と幅広いレパートリーを誇っている。共演指揮者としては、リッカルド・ムーティ、ピエール・プーレーズ、クリスト・フォン・ドホナーニ等がおり、その他にも新旧の著名な指揮者と共演している。日本では、ミラノ・スカラ座歌劇場公演オペラ『ウィリアム・テル』がNHK衛星放送、及びレーザー・ディスク

クによって紹介されている。

現在もテノールオペラ歌手の現役として活躍しているが、ヴィヴァルディ音楽院の教授として後進のオペラ歌手のベル・カント唱法の指導にもあたっている。最近最も活躍している新進テノールオペラ歌手：ホセ・クーラを育てた指導者としても有名である。

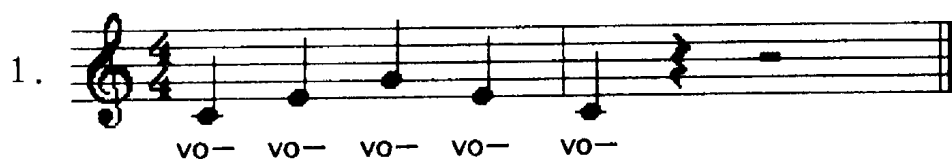
③アントニエッタ・ブラガニョーロ氏によるベル・カント唱法のための発声法について。

◎研修回数：44回

◎研修内容

基本的にはヴィットーリオ・テッラノーヴァ氏の発声法と同じであるが、上唇に響きを集めるための母音の使い方に特徴がある。常にウ（U）から始め、ウ（U）からオ（O）、ウ（U）からエ（E）、ウ（U）からイ（I）と母音を変えながら音階の上を移動する。ウ（U）から他の母音へ変化する時、響きを下に落とさずに、必ず上へ持ち上げながら（Sollevare）声を繋ぐ。

◎母音を使ったベルカント唱法のための発声法（Vocalizzazione）



（c<sup>1</sup>音から半音ずつ上げてf<sup>2</sup>音まで、その後半音ずつ下がりc<sup>1</sup>音に戻る。）

- 喉を開放する。（Apri gola）
- 最初をしっかりと横隔膜で決める。（Linizio e importante）
- 横隔膜の緊張感でしっかりと声を支える。（Appoggia bene）
- それを常に持続させる。（Sempre tiene la pancia）
- 口はしっかりと縦に開け、響きは上方へ。（Devi arire sibocca in giu. Pero pensare insiemesuono alto o alta）
- 声を繋げる。（Lega bene）

- 声を喉で押さない。(Non spingere)
- 二番目ミ, 三番目ソの音を持ち上げることが大切。(Solleva bene)
- 身体や頭が前のめりにならない。常に横隔膜中心に。(Senza corpo)
- オ (O) の発音が曖昧にならない。よりオ (O) のポイントへ, 常に響きが前へ, 外へ, 上方へ。(Non large, Avanti, Fuori, Sopra)
- 音が高くなれば, オ (O) はよりウ (U) に近く。しかし, 開口が狭くならないように, 徐々に縦に開けて。(Vicino U. Ma giu la bocca)
- 円を描くように息を回す。(Come luota)
- 低い音の時に舌が上へ上がらない。(Sotto la lingua)
- 低い音の時に常に響きが上へ上がる。(Salire semore)



(g<sup>1</sup>音から半音ずつ上げて c<sup>3</sup>音まで, その後半音ずつ下がり g<sup>1</sup>音に戻る。)

- UO から UE に移る時に横隔膜と響きののポジションを変えない。(Non cambiare)
- UからOは, 常に響きを持ち上げる。(Sempre sollevando O)
- 音が下がる時に, 一緒に横隔膜の支えまで緩んで落ちないように。(Non cadere)
- UO と同じ横隔膜と響きのポジションで UE をとらえる。(Come UO)
- そして, 二番目の UE は, より高く意識して。(Più alto)
- 声の出だしは, 考え過ぎずにすぐにスタートする。(Subito)
- 音が高くなっても真っ直ぐな姿勢で。(Con testa dritto)
- 音が高くなれば, UO O のこの二番目の O の響きが落ちないように。
- E音, F音ぐらいから集中して声を前方に曲げ, 高音に向かう。

(Raccogliere, Girare, Passaggiare)

- H音, C音は集中したポイント, 最も高く, そして広がりを感じて, 常に繋げる。(Punta, Altissima, Ampio, Lega bene)

- 音が高くなれば、始めの音をハミングで感じることも大切である。
- 音が高くなれば、思い切って喉を開け広げる。(Spalanca)
- 出だしの UO で響きが不足していれば、それは鼻を中心とした共鳴腔と横隔膜が繋がっていない。(Non c'è diaframma)
- UI を口先、喉で押し過ぎない。(Non spingere)
- 音が下がってきても、絶対に横隔膜を緩めない。(Non lasciare, Sempre tiene la pancia)
- 音が下がってきても、常に響きを感じる。  
(Perchè schiacci? Tiene la vivrazione)



- すべて上顎の上方で響くように。(Vibra bene)
- 常に響きを上方へ、空間を感じて。(Salire bene con spazio)
- 二番目の O は響きを持ち上げて。(Solleva la O, Alto Alto)
- 二番目の O が大切、横隔膜で。(Tenere con pancia)
- リラックスして。(Rilassare)



- 出だしの UO が大切。すぐに横隔膜で支え、よく口を開き、上顎に響きを持ち上げて、肩や首はリラックスし、躊躇せずにそのままの息の流れでオクターブ上の音に跳躍する。

(Subito appoggia, Apri bene, Vibra, Libera)

- 音が下がる時に響きと横隔膜のポジションを落とさない。(Non cadere)

◎アントニエッタ・ブラガニョーロ氏の略歴

ミラノ・スカラ座歌劇場合唱団の団長として活躍。1996年現役を引退後、ベ

ル・カント唱法のための発声法の指導者として後進のオペラ歌手の指導にあっている。

※今回の研修を終えて、私の理解するベル・カント唱法のための発声法とは。

ベル・カント唱法のための発声法とは、先ず、ある程度の緊張感を持った横隔膜（Diaframma）で呼気（Espirazione）をしっかりと支え（Appoggiare）、喉は力まずに横隔膜（Diaframma）から前頭葉（Testa）まで筒のような繋がりを意識し、常に上唇から鼻にかけて響き（Timbro）を集め、呼気に乗せて前方（Avanti）へ声（Voce）を送り続ける。言葉で表現すれば、ざっとこのような発声法である。

しかし、横隔膜の支え方の微妙なバランスや、低音域・中音域・高音域によって響きをあてるポイント（Punto）の角度が、少しずつ変化する（Girare）ことを言葉で表現することは困難である。どの音域の音に対しても、身体が自然に反応するまで何度も繰り返し練習することが大切なこととなる。

また、響きは母音が変化しても音色や音量は変化せずに、常に豊かに前方へ、身体の外へ流れること、そして、高音（Acuto）では縦に口が開き、口の中によく共鳴する空間（Spazio）が必要なことも大切なことである。ただ、この時に顎が少しでも上へ上がってしまえば、響きは集中力を欠き、後ろへ散ってしまう。姿勢は常に真っ直ぐ（Diritto）に、わずかに下向きの方がお腹との繋がりが（Legare）を感じ易くなる。

④外国人のための国立イタリア言語課程について。

◎研修期間：1997年10月15日～1998年6月11日

◎研修内容：イタリア語文法・リスニング・スピーキング・ライティング

不定冠詞，定冠詞，名詞，形容詞，所有形容詞，人称代名詞直接補語，人称代名詞間接補語，前置詞，前置詞と定冠詞の結合形，規則動詞，不規則動詞，再帰動詞，直説法現在，直説法近



過去, 直説法半過去, 直説法遠過去, 直説法未来, 条件法, 命令法

◎指導教官：ティツィアーナ・フリゴリ氏

⑤ミラノ・スカラ座歌劇場によるオペラ公演, バレエ公演, 及び各種コンサートの鑑賞について。

- ・コンサート日時
- 場所
- プログラム
- 出演者

1. 1997年10月23日

- ミラノ・スカラ座歌劇場
- ヴェルディ作曲オペラ『ラ・トラヴィアータ』
- 指揮：リッカルド・ムーティ 演出：リリアーナ・カヴァーニ
- 配役：ヴィオレッタ：アンドレア・ロスト  
アルフレード：ジュゼッペ・サッパティーニ  
ジェルモン：ロベルト・フロンターリ

2. 1997年10月30日

- ミラノ・スカラ座歌劇場
- チャイコフスキー作曲バレエ『白鳥の湖』
- 指揮：アレキサンダー・ヴェデルニコフ 振り付け：ルドルフ・ヌレエフ
- 配役：ミラノ・スカラ座歌劇場バレエ団

3. 1997年12月5日

○ミラノ・スカラ座歌劇場

○ヴェルディ作曲オペラ『マクベス』

○指揮：リッカルド・ムーティ 演出：グラハム・ヴィック

○配役：マクベス : レナート・ブルゾン

マクベス夫人：マリア・グレギーナ

バンコ : カルロ・コロンバラ

マクダフ : ロベルト・アラニーヤ

マルコム : ファビオ・サルトリ

4. 1998年1月14日

○ミラノ・スカラ座歌劇場

○ニノ・ロタ作曲オペラ『フィレンツェの麦わら帽子』

○指揮：ブルーノ・カンパネッラ 演出：ピエール・ルイージ・ピッツィ

○配役：ファディナルド：ヤン・ディーゴ・フロレッツ

ノナンコート : ジョヴァンニ・フルラネット

エミリオ : アルフォンゾ・アントニオッツィ

5. 1998年1月20日

○ミラノ・スカラ座歌劇場

○ミラノ・スカラ座フィルハーモニー管弦楽団のトップ奏者によるコンサート

○曲目：ドビュッシー作曲：『フルート、ヴィオラとハープのためのソナタ』ラヴェル作曲『序奏とアレグロ』／フォーレ作曲『ピアノ五重奏曲ニ短調』

6. 1998年4月9日

○ミラノ・スカラ座歌劇場

- モーリス・ヤッレ作曲バレエ『パリのノートルダム』
- 指揮：デイヴィッド・ガルフォース 振り付け：ローランド・ペティ
- 配役：ミラノ・スカラ座歌劇場バレエ団

7. 1998年5月11日

- ミラノ・スカラ座歌劇場
- ミラノ・スカラ座フィルハーモニー管弦楽団のメンバーによる打楽器アンサンブル
- 曲目：日本古謡『さんの太鼓』／ドビュッシー作曲『子どもの領分』

8. 1998年5月31日

- ミラノ・スカラ座歌劇場
- ミラノ・スカラ座フィルハーモニー管弦楽団のメンバーによるブラズバンドコンサート
- 曲目：ジョヴァンニ・ガブリエーリ作曲『ソナタ・ピアノとフォルテ』ムソルグスキー作曲『展覧会の絵』

9. 1998年6月13日

- ミラノ・スカラ座歌劇場
- ミラノ・スカラ座フィルハーモニー管弦楽団
- 指揮：リッカルド・ムーティ
- 曲目：モーツァルト作曲『フルートとハープのためのソナタK. 299』プロコフィエフ作曲『交響曲第3番ハ短調 op. 44』

⑥ ヴェローナ野外劇場でのオペラ公演の鑑賞について。

1. 1998年7月6日

- ヴェローナ野外劇場
- ヴェローナ野外劇場管弦楽団

- ヴェルディ作曲オペラ『アイーダ』
- 指揮：アンジェロ・カンポーリ 演出：ジャンフランコ・デ・ボジーオ
- 配役：アイーダ：ダニエラ・ロンギ  
アムネリス：キャサリン・キーン  
ラダメス：ケイト・オルセン  
アモナズロ：パオロ・ガヴァネッリ

#### 資格等の取得について

外国人のための国立イタリア言語課程（中級）認定

Il corso statale di formazione linguistica per stranieri di livello di consolidamento

1998年6月4日発行

#### 研究成果の発表について

オペラ公演出演による発表

##### ①関西歌劇団創立50周年記念・日伊合同制作

ヴェルディ作曲オペラ『アイーダ』のラダメス役として出演。

〔日時〕 1998年11月26日（木） 6：30 pm 開演

〔場所〕 大阪フェスティバルホール

〔指揮〕 ティツィアーノ・セヴェリーニ

〔演出〕 ステファノ・モンティ

〔オーケストラ〕 関西フィルハーモニー管弦楽団

〔出演者〕 アイーダ：ノルマ・ファンティーニ（ソプラノ）

ラダメス：山本裕之

アムネリス：田中友輝子

アモナズロ：田中 勉

②神戸親和女子大学 児童教育学会 在外研究発表会

〔日時〕 1999年1月20日（水） 3：00 pm ～ 4：00 pm 開演

〔場所〕 神戸親和女子大学 学生会館 記念ホール

〔出演者〕 山本 裕之（本学助教授，テノール）

荒田 祐子（神戸女学院大学講師，メゾソプラノ）

沢田真智子（本学講師，ピアノ伴奏・ピアノ独奏）

〔プログラム〕

◎第1部 世界の名歌

1. 『この道』 北原白秋 作詩，山田耕筰 作曲  
(日本)〔山本〕
2. 『からたちの花』 北原白秋 作詩，山田耕筰 作曲  
(日本)〔山本〕
3. 『野ばら』 ゲーテ 作詩，シューベルト 作曲  
(ドイツ)〔荒田〕
4. 『夢のあとで』 フォーレ 作曲  
(フランス)〔荒田〕
5. 『時には母のない子のように』 黒人霊歌  
(アメリカ)〔荒田〕
6. 『帰れソレントへ』 デ・クルティス 作詩，作曲  
(イタリア)〔山本〕
7. 『私の太陽よ』 ディ・カプア 作詩，作曲  
(イタリア)〔山本〕

◎第2部 ピアノ名曲

8. 『幻想即興曲』 Op. 66 ショパン 作曲〔沢田〕

◎第3部 オペラ

9. 『花の歌』 ビゼー作曲オペラ「カルメン」  
よりホセのアリア〔山本〕

10. 『ハバネラ』 ビゼー作曲オペラ「カルメン」  
よりカルメンのアリア〔荒田〕
11. 『清きアイーダ』 ヴェルディ作曲オペラ「アイーダ」  
よりラダメスのアリア〔山本〕
12. 『あなたの運命を裁く裁判』ヴェルディ作曲オペラ「アイーダ」  
よりアムネリスとラダメスの二重唱〔荒田・山本〕

③神戸アーバン・オペラハウス公演

プッチーニ作曲オペラ『マダム・バタフライ』のピンカートン役として出演予定。

〔日時〕 1999年5月15日（土） 6：00 pm 開演

〔場所〕 神戸文化大ホール

〔指揮〕 阪 哲朗

〔演出〕 松本重孝

〔オーケストラ〕 大阪センチュリー交響楽団

〔出演者〕 蝶々夫人 : 田中潤子

ピンカートン : 山本裕之

スズキ : 荒田祐子

シャープレス : 井原秀人

**在外学術研究員規定に基づく現況報告書**

(1997, 9～1998, 8)

①1997年9月：現況報告書（9月22日）

この度、平成9年度神戸親和女子大学在外学術研究員として、8月28日無事ミラノに到着し、今日で約4週間立ちました。ようやく少し落ち着きましたが、滞在許可証・納税者証明書の申請、銀行口座の開設、住まいの引っ越し等のい

ろいろな事務手続き上の問題があり大変苦勞致しました。住居の件につきましては、あらかじめ日本から現地の不動産屋を通して契約していたアパートが、なんと清掃局の隣でした。清掃車の出入りの騒音（夜間も）と悪臭のため安眠できない日々が続き、2週間は我慢したのですが、どうしても耐えられず、もう少し環境の良いアパートを見つけて引っ越ししました。しかし、ミラノの中心街には変わりありませんので車の騒音には悩まされています。

研修は、9月の2週目からスタートしました。スカラ座歌劇場の副指揮者兼コレペティトゥーア：ダンテ・マッツォーラ氏のところへ通い、オペラのスパルティート（マスカーニ作曲オペラ『カヴァレリア・ルスティカーナ』）と、イタリア歌曲（トスティ作曲）を中心に研究しています。

また、ミラノの郊外にあるノヴァーラ市立ヴィヴァルディ音楽院教授：ヴィットーリオ・テッラノーヴァ氏のところでベルカント唱法による発声法（パッサッジョ、ジラーレ、アクート、アッポッジャーレ、レガート、レスピラツィオーネ等）を用いたオペラ歌唱法を研究しています。研修も始まったばかりですが、今までの私の発声法を基本からじっくりと見直す良い機会となりそうです。ただ、残念なことにテッラノーヴァ教授は10月より11月中旬まで、東京の武蔵野音楽大学の招聘教授として日本へ行かれるので、その間は指導して頂けないことになりそうです。

その他、10月から来年の6月まで、毎週4回3時間ずつ外国人のための国立イタリア言語課程にも通うことになりました。歌唱に必要なイタリア語もしっかり研修したいと思っております。

こちらは9月15日を境に急に寒くなりました。（それまではミラノにしては珍しく、連日30度を越える異常な暑さでした。）日中は気温が25度くらいまで上がりますが、朝晩は12度くらいまで下がります。もう長袖シャツに上着が必要です。

しかし、ようやくさわやかな秋の気候となりました。日本も少しは涼しくなりはじめた頃でしょうか。

これからもいろいろな問題がありそうですが、本学が与えて下さったこの研

修を今後に生かせるよう、しっかり研修に励みます。

②1997年10月：現況報告書（10月28日）

10月に入りミラノでの生活にも慣れ、ようやく落ち着いて研修に励んでおります。こちらは気温が下がり秋らしい気候となったものの、その後10月の中旬まで、また30度近くまで上がる異常気象が続いておりました。しかし、突然の嵐の後に、長く厳しい冬がやって来ました。朝晩は4度ぐらいまで下がります。街を歩くミラネーゼも、もう真冬のコートを着ています。ただ日本とは違い、アパート全体に暖房がよく効くので、家の中では半袖で十分です。

研修は、現在テッラノーヴァ教授が武蔵野音楽大学の招聘教授として、11月中旬まで日本へ行っておられるため、スカラ座歌劇場の副指揮者：マッツォーラ氏のところへ通っております。トスティ作曲のイタリア歌曲について指導して頂きました。

イタリア語の正確な発音（Pronuncia）はもちろんのこと、その言葉の語感（Sfumatura）まで細かなニュアンスを表現することが要求されます。また、しっかりとした身体の支え（Appoggio）の上で、響き（Timbro）がむらなく前へ（Avanti）、しかも変に声が揺れる（Ballare）ことなく歌うフレージング（Fraseggio）も要求されます。わずか7小節のフレーズを歌うのに、1時間にわたり指導を受けることもあります。精神的にも肉体的にも疲労困憊となります。

オペラは、マスカーニ作曲『カヴァレリア・ルスティカーナ』の譜読み（Spartito）を引き続き細かく指導を受けています。特に、母音のウ（U）の発音、高音（Acuto）への繋ぎ（Passaggio）が難しく、苦勞しています。本当に大変ですが、ベルカント唱法（Bel Canto）を会得するためには避けて通れない道ですので、何とか頑張りたいと思っております。

先日（10/23）、こちらへ来て初めてスカラ座歌劇場でオペラ：ヴェルディ作曲『椿姫』を鑑賞しました。ミラネーゼの一番好きなヴェルディのオペラだけにチケットの入手が難しく、結局ダフ屋から正規の料金の4倍の価格で、最



上階 (Galleria) を購入しました。それでも日本でのミラノ・スカラ座引越し公演の価格と比べると1/3ぐらいですが……。ミラノに住んでいるのに、なぜ定価で買えないのかと思うと、何ともやり切れない気持ちです。

スカラ座芸術監督でもある指揮者：リッカルド・ムーティの指揮は、スコアに忠実で堅実な音楽創りでしたが、時々極端にテンポの速いところがあり、緊張感はあるものの歌手にとっては少し歌い難そうでした。出演者の中では、アルフレード役のテノール：サッバティーニが素晴らしく、様々な声による表現を聴かせてくれました。来週はバレエ：チャイコフスキー作曲『白鳥の湖』を鑑賞する予定です。

国立イタリア語学校は、週に3日と1日減りましたが、必ず宿題もあり、学生時代に戻ったかのように語学を勉強しています。

こちらはちょうど一昨日 (10/26)、夏時間 (Ora legale) から正規の時間になりました。毎年10月の最終日曜日の午前3時に、1時間戻して午前2時とするそうです。(この時間帯が交通機関も止まっており、一番影響が少ないからだそうです) これで日本との時差が8時間となりました。

### ③1997年11月：現況報告書 (11月25日)

ミラノは11月に入り一段と厳しい寒さとなってきました。朝晩は零度以下となることもあります。今月半ばまでは寒さの上に雨もよく降り、本当にブルッテンポ (悪天候) でした。同じ北イタリアのヴェツネツィアでは、雨が降り続いたのと高潮の影響で潮位が上がり、サンマルコ広場一帯が水没してしまったほどです。

研修は、招聘教授として武蔵野音楽大学へ行っておられたテッラノーヴァ教授が、こちらへ帰って来られ、ベルカントのための発声法 (Vocalizzazione) を中心に指導して頂いております。また、スカラ座歌劇場のマッツォーラ氏のところでは、引き続きイタリア歌曲 (トスティ作曲) とオペラ：マスカーニ作曲『カヴァレリア・ルスティカーナ』を指導して頂いておりますが、私の娘がお世話になっておりますミラノ日本人学校 (児童生徒在籍者数：小学部143名・

中学部47名、計190名)より、生徒・保護者のためのミニ・コンサート(12月10日)への出演依頼があり、お引き受けさせて頂きましたので、その演奏曲目も合わせて指導を受けています。プログラムは下記の通りです。

[プログラム]

1. 『この道』 北原白秋 作詩 山田耕筰 作曲
2. 『からたちの花』 北原白秋 作詩 山田耕筰 作曲
3. オペラ「ラ・ボエーム」より『冷たき手を』 プッチーニ 作曲
4. ナポリ民謡『オ ソーレ ミーオ』 ディ・カプア 作曲
5. " 『帰れソレントへ』 デ・クルティス 作曲  
(こどもたちと一緒に)
6. 『あわてんぼうのサンタクロース』
7. 『赤鼻のトナカイ』

以上

ナポリ民謡は、今まで気楽に歌っていましたが、ナポリ語(方言)の正確な発音や響きを落とさずにしっかり支えて歌うことに苦労しています。発声法や歌唱法を見直している時期だけに、自分の思うように歌えるか不安でもあります。しかし、こちらで歌わせて頂ける良い機会ですので頑張ります。

イタリア語の語学学校の方は、大変楽しく学んでいます。先生は優秀な方で、全身を使ったユーモアあふれるアクションとテンポの良い授業の進め方で受講生を常に集中させています。その教授法は、大いに見習うべき点があります。クラスは25名で国籍もさまざまです。イギリス・フランス・オーストリア・スイス・スウェーデン・アルバニア・ロシアのヨーロッパをはじめ、中国・韓国・日本のアジア、エジプト・モロッコ・セネガル・マリのアフリカ、そしてアメリカ・ブラジル・コロンビアの北南米と国際色豊かです。イタリア語を学ぶだけでなく、イタリア語を媒体としてそれぞれの国の文化を垣間見ることもできます。

さて、日本でも報道されていることと思いますが、アッシジをはじめウンブ

リア地方の地震は今もって余震がおさまらず、テレビでも連日報道されています。こちらの建物はレンガを積み上げたものが多く、震度5程度の揺れでも建物の崩壊が起こるようです。本学の海外芸術研修で訪れたアッシジのサン・フランチェスコ修道院も大きな被害を受けており、修復には気の遠くなるような時間がかかると思われます。仮設テントやコンテナで生活している人々の様子をテレビで見るにつけ、神戸のことが思われます。

ミラノ日本人学校では、イタリアの現地校との交流を積極的に進めています。先日も現地校のナヴィリオ小学校との交歓会があり、学校にお願いし参加させて頂く機会を得ました。日本人学校小学部3年生がナヴィリオ小学校を訪問し、身近な自然や環境に目を向け、大切にしようとする心情を養うことを目的とした環境教育の行事に参加していました。環境について学ぶだけでなく、イタリアの子どもたちと一緒に球根を植えたり、植樹したりする活動を通して、お互いに交流も深めていました。最近、イタリアの小学校では日本と同様に環境教育を重視しており、ナヴィリオ小学校も研究校としての指定を受けています。今年のテーマは『水』で、各学年がさまざまな視点からアプローチしていました。子どもの身近な視点から環境教育に持っていくプロセスには、興味深いものがありました。

#### ④1997年12月：現況報告書（12月18日）

第22回児童教育学科定期演奏会では、多くの教職員の方々にお世話になりありがとうございました。盛会裡に終了したことを聞き、改めて皆様方のお力添えに心より厚く御礼申し上げます。

こちらは12月に入って一段と寒さ厳しくなり、今日の最高気温はわずか1度、朝からしんと雪が降り続いています。ミラノの街並みもあたり一面真っ白な銀世界となりました。木々も雪をかぶって、美しいクリスマスツリーになりました。神戸では、今年もまたルミナリエが行われているのでしょうか。Luminarieの本家イタリアでも、クリスマス用のイルミネーションが美しく輝いています。神戸のような大がかりなものではなく、雪の結晶や星の形などの簡単

なものですが、霧や曇りの日が多いミラノの街では、心和むものです。

12月10日にはミラノ日本人学校で、歌う機会がありました。ミラノにはスカラ座歌劇場があるというものの、なかなか子どもたちたちには行く機会がないそうで、是非、生の声を聴かせてほしいということでした。小学校1年生から中学校3年生までの生徒と、その保護者を対象に歌いました。日本人学校では週に2時間イタリア語の授業があり、子どもたちはイタリア語の歌は歌詞が分かるということもあるのでしょうか、静かに真剣に聴いてくれたので、うれしく思いました。発声法を基礎から見直している時期だけに緊張しましたが、今研究していることが少しかめたような気がしました。明日からは先生方もクリスマスの休暇を取られるので、研修もしばらくお休みです。また来年から新たな気持ちで頑張ろうと思っています。

#### ⑤1998年1月：現況報告書（1月26日）

ミラノでは凄まじい爆竹と花火の音で新しい年が明けました。日本では12月25日を過ぎるとクリスマスも終わり、一挙に正月を迎える準備に入りますが、こちらでは1月6日のエピファニーア（Epifania：東方の三博士によって代表される異邦人に対して、キリストが自己を顕示したことを記念する祭り）までをクリスマスとし、翌7日から学校や会社が始まって、ようやく普段どおりの生活に戻りました。街の大通りの電飾も外され、代わりにウィンドウには、サルディ（Saldi：バーゲン）の貼り紙が目立っています。

研修の方はおかげさまで順調に進み、現在はプッチーニ作曲オペラ『トスカ』の指導を受けています。全曲を暗譜し、ベル・カント唱法で響きをそろえて歌うことを重点に取り組んでいます。細かい部分まで響きをそろえるということは、なかてか難しく、精神的にも肉体的にも厳しいものがあります。そのせいか5kg痩せて、思わぬダイエットとなりました。

今月より、新たにベル・カントの発声の先生（アントニエッタ・ブラガニューロ氏）にも指導を受けることとなりました。長年スカラ座歌劇場の合唱団長をしておられた方です。ウ（U）と、オ（O）の母音を中心に上唇に響きを集め、

中音から高音 (Acuto) への繋ぎ (Passaggio) を研究しています。頭で考えてするのではなく、身体が自然に反応するようになるまで、これもまた何度もくり返し練習が必要です。

毎年スカラ座歌劇場は聖アンブロシウス (ミラノの守護聖人) が生まれた12月7日に開幕します。今年は、ヴェルディ作曲オペラ『マクベス』で幕開けとなりましたが、初日にはイタリアの首相をはじめ政財界人や各国大使も招かれ、全世界に中継放送されます。一般の人がチケットを手に入れることはまず不可能ですが、私は幸運にも前々日に行われた劇場関係者だけに公開されるリハーサルを観ることができました。開幕オペラだけに指揮者リッカルド・ムーティーの力の入れようも大変なもので、素晴らしい演奏に感激いたしました。もちろんソリストも良かったのですが、特に合唱が素晴らしく、圧倒される思いでした。また、舞台装置や衣装における色の使い方は、斬新で興味深いものでした。そして今月も14日に今シーズン2作目のオペラ、ニーノ・ロタ作曲：オペラ『フィレンツェの麦わら帽子』のリハーサルを観ることができました。オペレッタ (喜歌劇) の要素が濃いオペラで、この種のオペラがスカラ座歌劇場で上演されるのは初めてのようです。今後オペラの上演はモーツァルト作曲『魔笛』、ドニゼッティ作曲『シャモニーのリンダ』、ヴェーバー作曲『魔弾の射手』、プッチーニ作曲『マノン・レスコー』、ドニゼッティ作曲『愛の妙薬』と続きます。日本では、このように続けてオペラを観る機会というのはあまりありませんから大変楽しみです。

イタリア語語学学校の方は、2月2日に前期の試験があります。筆記試験のほか、リスニングと質問に答えるスピーキングのテストがある本格的なもので、こちらにも真面目に勉強しなければなりません。

ミラノも暖冬とはいえ、まだまだ寒さが厳しいですが、空が澄んで星が美しい時期でもあります。夕刻、窓から眺めると、木星と金星がひときわ明るく輝いています。ガリレオ・ガリレイはこの木星と金星にも手製の望遠鏡を向け、木星の4大衛星と金星の満ち欠けを発見しました。私は今、ガリレイの国イタリアで当時と変わらぬ空を見ているのだと思うと感慨深いものがあります。

⑥1998年2月：現況報告書（2月25日）

一般B入試のため、2月3日より10日間、一時帰国しておりましたが、13日の夕刻ミラノに戻りました。日本へ帰国する前のミラノは、最低気温-2度、最高気温+5度の厳しい寒さでしたが、戻ってみるとなんと+21度の暖かさでした。もちろんこれは異常気象で、ヨーロッパ全体がこの時期としては60年ぶりの暖かさを記録したようです。この陽気は一週間続き、その後徐々に平年並に戻ってきましたが、それでも、もうまちがいなく春です。ドゥオーモ広場には小さな梅の木（杏かもしれません）が何本かあり、ぽつぽつと花をつけはじめています。

こちらへ戻った翌週より、また研修に励んでいます。現在、プッチーニ作曲オペラ『トスカ』を終え、ヴェルディ作曲オペラ『アイダ』に取り組んでいます。グランドオペラだけに、なかなか日本で上演される機会はありませんが、緊張感のある音楽が素晴らしく、主役の歌手にとってもコーラスにとっても、歌い甲斐のあるオペラです。全曲を暗譜し、ベル・カント唱法で響きをそろえて表現することを重点に、マツォーラ氏の指導を受けています。ブラガニョーロ氏のところでは、ベルカント唱法のための発声法を研究しています。ウ（U）とオ（O）の母音を使い、しっかりとした身体の支え（Appoggia）の上で、すべての響き（Vibrazione）が常に横隔膜（Diaframma）と繋がって前方（Avanti）へ流れるように練習しています。これもまた辛く厳しい練習ですが、身体が自然に反応するようになるまで何度もくり返しています。

⑦1998年3月：現況報告書（3月23日）

ミラノでは3月に入り、梅・桃・杏・木蓮・レンギョウ等の木々が一斉に花をつけ、地味な色合いの街に春の明るさを添えています。寒の戻りもありますが、快晴のお天気が続き、気温も20度近くまで上がる日が多くなりました。昨日（3/21）は、日本では「春分の日」ですが、ここイタリアでも、この日を「春の日」（La giornata di primavera）と名づけています。日本でも春や秋に文化財の一般公開というのがありますが、こちらでもイタリア全土でこの日、

日頃は公開されていない歴史的な建造物がいくつか無料で公開されました。私もミラノから電車、バス、船と乗り継いで、コモ湖畔の昔ヴィスコンティ家の別荘であったヴィラ（Villa del Barbianello）を訪れました。真っ青な空とそれを写す湖面、春の日差しを一杯浴びた美しい庭園の中で、しばし優雅な時を過ごしました。

研修の方は、引き続き3名の先生方に指導を受けています。オペラはヴェルディ作曲『アイダ』を、イタリア語の発音と音楽性のある歌唱法について細かく指導を受けています。ベル・カント唱法のための発声法は、テッラノーヴァ氏とブラガニョーロ氏の指導を受けています。テッラノーヴァ氏は、今年1月の日本の第二国立劇場こけら落とし公演オペラ『アイダ』の主演ラダメスを歌った新進歌手ホセ・クーラを育てた先生でもあります。

早いもので研修期間も残り5ヵ月となりました。今までの発声法をベルカント唱法のための正しい発声法に矯正するのは大変ですが、なんとか自分のものにするべく努力しております。

#### ⑧1998年4月：現況報告書（4月20日）

ミラノは4月に入り、毎日曇りか雨、最高気温も8度ぐらいいまじか上がらない寒い日が続きました。2月、3月は大変暖かかったり、これも異常気象のせいでしょうか。4月12日、13日は復活祭（Pasqua）の祝日で、街では卵型のチョコレートやコロンバという鳩の形をした大きなケーキがショーウィンドーに所狭しと並べられました。中にはとても大きくて、手の込んだデコレーションを施された卵もあり、お菓子屋の前で立ち止まること度々でした。多くのイタリア人はこの前後1週間程度の休暇を取り旅行に出かけましたが、この悪天候で散々な休日となったようです。今月は久しぶりにスカラ座歌劇場でバレエ公演を鑑賞する機会を得ました。モーリス・ヤッレ作曲『パリのノートルダム』でした。タンバリン、ドラムスなど打楽器の打ち鳴らす歯切れのよいリズムに乗って、次々と繰り出されるダンスには、終始圧倒されました。ある時は直線的に、ある時は柔らかい曲線になる、人間の身体がこのように自由自在の表現

力を持っていることに改めて感動しました。現代音楽と新しいバレエの組み合わせは、決して奇抜なものではなく、躍動感にあふれる素晴らしいものでした。

研修は、引き続き3名の先生方に指導を受けています。この研修も残りあと4ヵ月となり、気ばかり焦っています。

#### ⑨1998年5月：現況報告書（5月25日）

ミラノでは5月に入っても肌寒い日が続いておりましたが、今度は一挙に34度まで上がり、5月としては130年ぶりの暑さを記録しました。こちらへ来てからは異常気象の連続ですが、5月の後半にはやっと爽やかなな青空が広がるようになり、1年で一番過ごしやすい観光シーズンの季節となりました。

今月はスカラ座歌劇場で打楽器アンサンブルのコンサートを鑑賞する機会を得ました。日本の『祭り囃子』を編曲した曲や、ドビュッシーのピアノ曲『子どもの領分』を編曲した曲もあり、マリimba、ビブラフォン、木琴、鉄琴、ドラ、ティンパニ、シンバル、大太鼓、小太鼓、チャイム、カスタネット、和太鼓など、ありとあらゆる打楽器がステージにいっぱい並べられ演奏されました。6人の打楽器奏者の打ち鳴らす歯切れのよいリズム演奏に、観客はブラヴォーの嵐でした。レベルの高い、そして意欲的な演奏は、打楽器の魅力を十分に伝えてくれたように思います。今月は31日にもう一度、スカラ座歌劇場で金管楽器アンサンブルのコンサートを鑑賞する予定です。プログラムは有名なムソルグスキー作曲『展覧会の絵』ですので、どのような演奏が聴けるか楽しみです。

研修の方は残りあと3ヵ月となりました。最後の追い込みで週に5回も先生方に指導を受ける時もあります。どれだけベル・カント唱法を自分のものにするか、焦りを感じながら練習する毎日です。

国立イタリア語学校は、今月末ですべての授業が終わり、6月初めの試験で修了となります。

#### ⑩1998年6月：現況報告書（6月22日）

ミラノは、毎日真っ青な空が広がる爽やかな天気が続いています。こちらの



学校は、6月が学年末ですので、6月半ばにそれぞれの修了試験を終え、9月までの長い夏休みに入りました。夏のヴァカンスシーズン到来で、近所では、すでに錠戸を閉めてヴァカンスに出かけたところもあり、また逆に街中では、外国人の姿を多く見かけるようになりました。

ところで、日本でもかなり盛り上がっているようですが、こちらでも『La coppa del mondo』（ワールドカップ）は、テレビで全試合放送されています。イタリアが試合に出場する日は、街の中心ドゥオーモ広場に仮設の大型スクリーンが登場し、熱狂的なファンの歓声でミラノの街全体が騒然となります。これでイタリアが優勝でもすればどんな騒ぎになるのか、今から心配しています。

今月はスカラ座歌劇場でリッカルド・ムーティ指揮のスカラ座フィルハーモニーオーケストラのコンサートを鑑賞しました。プログラムは、有名なモーツァルト作曲『フルートとハープのための協奏曲K. 299』と、プロコフィエフ作曲『交響曲第3番』でした。特に、フルートとハープの独奏者のかけ合いが素晴らしく、オーケストラとも息のぴったりと合った演奏を聴かせてくれました。

研修もいよいよ残り少なくなりました。少しずつではありますが、ベルカント唱法が身についてきたように感じています。日本でその成果を十分に発表できるよう、あと2ヵ月しっかり頑張ります。

国立イタリア語学校は6月2日・3日の修了試験も無事に終わり、6月11日に修了証書を頂きました。

#### ①1998年7月：現況報告書（7月30日）

ミラノでは7月に入り、夜も寝苦しいほどの大変厳しい暑さが続いています。早いもので、こちらでの研修も残り1ヵ月となりました。先週は、5日間連続でブラガニョーロ先生の夏期講習会があり、日本からの参加者とともに私も受講しました。

この講習会が、私の今回のイタリアでの研修の最後でしたので、一年間の総まとめとしてベルカント発声法の指導を受けました。

夏はミラノスカラ座歌劇場でのオペラ公演はお休みですが、イタリア各地に

ある野外き劇場でオペラが上演されます。そこで、中でも有名なヴェローナのアリーナ（紀元1世紀のローマ時代の闘技場）で行われている野外オペラ鑑賞に出かけました。

ヴェローナは、ミラノから特急列車で1時間30分、ヴェネツィアとともにヴェネト州を代表する芸術都市です。ダンテが亡命生活を送り、シェイクスピアの『ロメオとジュリエット』の舞台となったこの町は、古来より数多くの芸術家を生んでいます。今回は、ヴェルディ作曲オペラ『アイダ』を鑑賞しました。2万2千人収容のアリーナに、巨大なスフィンクスが並ぶ大掛かりな装置を使ったこのオペラは、野外劇場の演目でも最も人気のあるもののひとつです。マイクなしにアリーナに響きわたる音響効果も素晴らしく、ソリスト、合唱の熱演によって大スペクタクルを楽しむことができました。

#### ⑫1998年8月：現況報告書（8月20日）

ミラノは8月も7月に引き続いて、夜も寝苦しいほどの厳しい暑さが続きましたが、8月半ばの雷鳴と強風を伴った激しい雨（Temporale）の日を境に、暑さも少し和らぎ、しのぎやすい気候となりました。多くのイタリア人は、長期休暇（Vacanza）を取り、この時期のミラノの人口は130万人から30万人にまで減るそうです。スーパーマーケットを除いて、レストラン・バー・商店等もほとんど休業しており、街は閑散としています。こちらのテレビニュースでは、今、目立つのは日本人観光客ばかりなり、ということらしいです。他の国からも沢山の観光客が来ているのですが...

さて、先生方から直接指導を受ける研修は7月末ですべて終了しました。現在は、研修報告書の作成に取りかかっています。研修の総まとめとして、ベルカント唱法のための発声法をまとめていますが、身体で覚えた感覚を、言葉で表現することは、なかなか難しい作業です。また、今回の研修の成果を発表させて頂く機会として、帰国後、11月のオペラ公演に出演することが決まりました。演目は、ヴェルディ作曲オペラ『アイダ』、私はラダメス役を歌います。舞台装置もすべてイタリアから運ぶ大掛かりな公演となるようですので、1年

間の研修の成果が出せるよう、引き続き努力したいと思います。



# MINISTERO DELLA PUBBLICA ISTRUZIONE

Circolo didattico (1) "Armando Diaz" Comune MILANO Prov. MI  
 Scuola elementare statale  
 Intitolazione "Armando Diaz" Comune MILANO Prov. MI  
 Anno scolastico 1997/1998 Classe " CORSO DI ALFABETIZZAZIONE E FORMAZIONE LINGUISTICA PER IMMIGRATI STRANIERI"

I. Signor... YAMAMOTO HIROYUKI  
 (cognome) (nome)  
 nat. il 15/03/53 a HYOGO GIAPPONE

## CORSI DI ALFABETIZZAZIONE PER ADULTI O.M. n. 400 del 30 luglio 1996

### ATTESTATO

I.I... Signor... ha frequentato

il "CORSO DI ALFABETIZZAZIONE E FORMAZIONE LINGUISTICA PER IMMIGRATI STRANIERI"

ed è stato ammesso al successivo grado dell'istruzione obbligatoria



IL DIRETTORE DIDATTICO (1)  
LA COLLABORATRICE VICARIA

*Carla Garbagnati Crosi*  
*Carla Garbagnati Crosi*

(1) Per gli istituti comprensivi di scuola materna, elementare e media v. D.M. 12 luglio 1996, n. 538

(\*) Scrivere per esteso la dizione valida:

"è stato ammesso alla .....classe elementare"; ovvero: "è stato ammesso al successivo grado dell'istruzione obbligatoria".

"non è stato ammesso alla .....classe elementare"; ovvero: "non è stato ammesso al successivo grado dell'istruzione obbligatoria".

# CIRCOLO DIDATTICO

VIA CROCEFISSO,15 MILANO

Sede dei corsi: via Tadino, 12 Milano

## ATTESTATO DI FREQUENZA

ANNO SCOLASTICO 1997.-1998.

..I.L..... SIGNOR..... YAMAMOTO HIROYUKI.....

nat. ° il 15/03/53.....

a ..... HYOGO ..... GIAPPONE.....

ha frequentato il corso statale di formazione linguistica per stranieri

di livello ..... DI CONSOLIDAMENTO.....

Milano, ..... - 4 GIU. 1998.....

LA DIRETTRICE DIDATTICA

LA COLLABORATRICE VICARIA

(Carla Garbagliati Crosi)

*Carla Garbagliati Crosi*